

漱石と魯迅の比較研究の試み

——『坊つちやん』と『阿Q正伝』の接点を中心に——

樂 殿 武

夏目漱石と魯迅は、日本と中国の近代文学における国民作家として、その作品がこれまで広く日中兩國の読者に親しまれてきた。中でも、『坊つちやん』と『阿Q正伝』はもともと読まれて

いる。両作品がこれほど大勢の読者を獲得できた魅力は、まず、面白いという感想のほか、恐らく作品の主人公のイメージが頭にこびりついて、なかなか忘れられないのであろう。『坊つちやん』と『阿Q正伝』は、広範な読者層を持つているだけでなく、漱石と魯迅の初期文学において、それぞれ重要な位置を占めている。しかし、漱石と魯迅との比較研究の中で、両作品の接点に関する研究がそれほど進められていないのは現状のようである。実際、『坊つちやん』と『阿Q正伝』を比較すると、まず、内容から見れば、両作品にともに主人公の失敗が多く書かれ、その失敗の滑

稽さによつて読者を笑わせるという表面上の相似が存在するのではないかと思われる。両作品はこの表面上の相似に止まらず、その深層において、主人公の典型的人間像の造形、主人公の失敗談による物語の展開の方法、作品のユーモア的表現手法など、いくつかの面で共通しており、考察する必要があると思う。

漱石と魯迅の文学については、日本と中国で今までそれぞれ膨大な研究資料が発表されている。比較文学の分野に関しては、松山久雄氏、平川祐弘氏、藤井直三氏、李國棟氏及び林叢氏などの研究者がすでに漱石と魯迅における伝統と近代の問題、漱石と魯迅の留学体験の明暗、漱石と魯迅文学におけるアンドレーエフの投影及び魯迅の作品における一部の漱石文学の影響など、多方面にわたつて、比較論を展開してきた。過去の研究を見てみると、概論的なものは多いが、作品の比較研究、または対照研究は少なかった。近年になつて、新世代の研究者達は、初めて漱石と魯迅の作品分析を通して、漱石と魯迅の小説における影響関係、漱石

と魯迅文学におけるロシア作家の投影を指摘するなど、作品分析に重点を置くようになりつつある。比較文学の研究においては、作家間の影響関係、文学的特徴の相似を比較的、対照的に論じると同時に、具体的に作品分析を通して作品の接点を探らなければならぬと思われる。

二

『坊っちゃん』は一九〇六年（明治三九年）四月、『ホトトギス』に発表された。その執筆期間は同年の三月一五日から二六日頃までの間と推定されている。着想から完成までの時間が極めて短く、その経緯については、多くの評論家が明治三九年の漱石の書簡に基づいて、すでに考察してきたが、作品については、発表後『東京朝日新聞』、『帝國文学』などに出た何篇かの同時代評、及び『漱石全集』の小宮豊隆の解説以外、長い間多く論じられなかった。伊藤整氏は『現代日本小説大系第一六巻・夏目漱石』解説（河出書房 昭和二四年）において、「それは小説らしい小説といふ意味では明治文学の卓抜せる傑作とも言ふべきものである。その理由は、筋とユーモアの損失のない高潮へと、駆け上がるやうなその創作の完全さによる。またもう一つ、その傑作である理由は、日本人の諸性格の、それまでに全く類のない把握である」と説明した。江藤淳氏は『夏目漱石』（勁草書房 昭和四〇年六月）の中で、「知識階級とはいまだに、坊ちゃん若しくは山嵐の行動をかなり真剣に憧れながら赤シャツ又は野だいの生活を活を余儀なくされている集団なのである」と、『坊っちゃん』と

日本知識階級との関連性を述べた。瀬沼茂樹氏は『夏目漱石』（東京大学出版会 昭和四五年七月）において、「社会諷刺や批判をめざした諷刺文学であるが、『漱石自身のうちに住む高貴な魂であるとともに、卑俗な魂の外在化であり、悲痛をきわめる自己批判であることを見のがしてはならない」と、その自己批判性に注目した。その後、ユニークな存在として、また『坊っちゃん』論の新しい時代を開いたのは、平岡敏夫氏の『坊っちゃん』試論（『文学』昭和四六年一月）である。論文の中で、平岡氏は「作品の真実からいえば帰京して街鉄にとどまっている坊っちゃんはずいぶんウソであり、坊っちゃんは死んだのである」という斬新な読みを展開した。それを受けて、竹盛天雄氏は論文「坊っちゃんの受難」（『文学』昭和四六年二月）で、「そのような適応による『死』は、すでに彼の最初の『変化』の中に同居していた」と、坊っちゃんの変化をさらに前の時期に求めた。さらに、その後小森陽一氏は『坊っちゃん』の（語り）の構造―裏表のある言葉（『日本文学』昭和五八年三―四月）で、語りの視点から新しい考察をした。近年の論文として、注目されているのは、亀井秀雄氏の『坊っちゃん』―「おれ」の位置・「おれ」への欲望（『日本文学』平成四年五月）と小谷野敦氏の『坊っちゃん』の系譜学―江戸っ子・金平・維新（『文学』平成五年夏号）である。

一方、魯迅の『阿Q正伝』は、一九二二年二月四日から翌年二月二日まで『晨报副刊』に連載された。その執筆について、魯迅自身は『阿Q正伝』の成因において次のように述べている。

……ここにおいて『阿Q』が革命党になるべきか否かの問題が発生せざるを得なかった。私の考では、もし中国が革

命しないならば、「阿Q」もしない。革命したとすれば、「阿Q」もする。……民国元年は既に過ぎ去って追うべくもないが、今後もまた改革があれば「阿Q」のような革命党は必ず出現するだろうと私は信じている。人々の云うように、私は現在以前のある一時期を描いたに過ぎぬ等ということは、私もそうありたいと思う。しかし私は、私の見たものが決して現在の前身でなく、恐らくは後身であること、それも二三十年後かもしれないという危惧さえ感ずるのである。

〔魯迅文集〕竹内好訳 第四卷 七三頁

魯迅と同時代の中国の作家成仿吾氏は「呐喊」の評論（『創造季刊』大正一三年一月）で、「阿Q正伝」を古い小説又は農村生活の再現小説として、その価値を高く評価しなかった。これに對して、作家茅盾氏は「呐喊」を読む（『文学週報』大正一三年五月）の中で、「私たちは、社会のあらゆる面をたえず『阿Q相』の人物に出くわした。ときには自分を顧みて、わが体内にも『阿Q相』の分子があるのじゃないか、とそのたびに疑わぬわけにいかなかった」と、自己解剖をした。竹内好氏は「魯迅」（未來社 昭和三六年五月）で、「阿Q正伝」は構成の緊密さにおいて「風波」に及ばないが、対象への没入の深さは「狂人日記」に迫り、中国の古典小説（たとえば『儒林外史』）から借りたかと思われる物語的展開の巧妙さと相俟って、彼の代表作の名を得ている。（中略）『阿Q』が中国人の代名詞であるという世評も承認する」と言った。丸山昇氏は「魯迅——その文学と革命」（平凡社 昭和四〇年七月）で、「阿Q正伝」をそれ以前の作品の

総括と見て、結局阿Qの死で作品が終わり、「あとには相変わらずの世界が残った。《暗黒》の循環は依然として拡大されて残っているのである」と、作品の意味を分析した。新島淳良氏は「魯迅を読む」（晶文社 昭和五四年二月）において、作品の形式や主人公の性格上の特徴及び阿Qと革命の関係という三つの方面から精力的に「阿Q正伝」を論じた。

このように、今まで、漱石と魯迅の文学に関する先行研究は、「坊っちゃん」と「阿Q正伝」を個別に論じてきたが、両作品を比較する論文はなかった。本稿では、漱石と魯迅の名作とも言える「坊っちゃん」と「阿Q正伝」の接点について、分析を試みたい。

三

漱石の「坊っちゃん」の冒頭に、「親譲りの無鐵砲で子供のときから損ばかりして居る」「小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある」という有名な段落がある。坊っちゃんがそんな愚かなことをする理由は極めて簡単である。「新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて来た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答へた。」

〔漱石全集〕第三卷 一一〇五頁

漱石はこの短い書き出しを通して、坊っちゃんの強がりの性格を鮮明に描き出した。このような子供特有の強がりの性格は、

小説の中においてほかにも多く現れている。例えば、小説の書き出しの後に、すぐナイフで自分の親指を切る失敗談がある。坊っちゃんも親類からもらったナイフを友達に見せたら、「光る事は光るが切れさうもない」と言われ、「切れぬ事があるか、何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つて見ると注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはずしに切り込んだ。」(同前)

坊っちゃんの強がりには以上の引用に止まるだけではない。作品の展開につれて、坊っちゃんの強がりも時は減らず口として現れてくる。減らず口は強がりの変形であり、つまり負けさうになつても、無理に我慢して平気なように見せるといふことである。坊っちゃんが教頭の赤シャツに挑発されて、数学主任の山嵐と喧嘩し、かつて氷水を奢つてもらつた一銭五厘のお金を返す部分がある。山嵐がそれを受け取らないので、その一銭五厘のお金がずっと二人の机の間に置いたまま、「この一銭五厘が二人の間の牆壁になつて、おれは話さうと思つても話せない、山嵐は頑として黙つてゐる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。仕舞には學校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた」といふ。あとで誤解が解けて、坊っちゃんはその一銭五厘のお金を取つて財布の中に入れてゐる。山嵐に原因を聞かれたら、「實は取らうと思つてたが、何だか妙だから其儘にして置いた。近來は學校へ来て一銭五厘を見るのが苦になる位いやだつたと云つたら、君は餘つ程負け惜しみの強い男だ」と山嵐は言う。また、初めての宿直の晩に起こつた生徒達の悪戯の「吶喊事件」の時、坊っちゃんは二階に上がったが、対策を思いつかない。「おれは勇氣のある割合に知慧が足

りない。こんな時にはどうして、か薩張りわからない。わからなければ、決して負ける積もりはない」と、述べている。

これらの部分を読んででも分かるように、坊っちゃんの強がりの性格の特徴が漱石の描写を通して、生き生きと感ぜられる。それに漱石は作中の人物山嵐の口を通して、坊っちゃんの性格の特徴を「負け惜しみの強い男だ」と明言している。坊っちゃんの子供時代の強がりの性格が大人になつても直らないばかりでなく、時にはメンツを重んじる方へ転化し、それが原因になつて、また思わぬ失敗をしてしまふ。例えば、四国の小さな町に着いた坊っちゃんが宿屋の人にチップをやる部分がある。

道中をしたら茶代をやるものだといふ居た。茶代をやらぬといふ粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらぬ所爲だらう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛織子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやらう。おれは是でも學費の餘りを三十圓程懐に入れて東京を出て來たのだ。汽車と汽船の切符代と雜費を差し引いて、まだ十四圓程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰うんだから構はない。田舎者はしみつたれだから五圓もやれば驚ろいて眼を廻すに極つて居る。……

〔漱石全集〕第三卷 一一六頁

その時、坊っちゃんが持つていた全財産は一四円で、これからもらえる予定の月給は四〇円である。しかし、そのチップは現時点の全財産の三分の一で、またこれからの月給の八分の一にも

相当する。一回のチップの金額にしては大きすぎる。どう考えても無茶な行為であると思われぬ。それで、あとで学校へ行って校長に会ったときに、「教育の精神について長い御談義を聞かした。(中略)生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、學問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの」などと説明されて、「こゝで断はつて歸つちまおうと思つた。宿屋へ五圓やつたから財布の中には九圓ながししかない。九圓ちや東京迄は歸れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しいことをした」という。これも強がりの延長であろう。メンツだけ大事にして實際の経済力を考えないで、一時の爽快ぶりのために結局損をして困つたのは坊っちゃん自身である。このように、坊っちゃんは強がりの性格によつて、いつも常識はずれのことをしてしまい、失敗談を重ねたのである。

『坊っちゃん』が読者に与える最も深い印象は、おそらく彼のいわゆる江戸っ子の氣質であろう。西山松之助氏の『江戸ッ子』(吉川弘文館 昭和五五年八月)によれば、江戸っ子は、常に「お膝下生まれ」という誇りを持っており、「宵越しの金は持たない」という金銭感覚を持っている。そのほか、「向こう見ずの強がり」と喧嘩早い」などの特徴がある。そして、江戸っ子氣質は結局優越感と抵抗精神の二つに集約されるという。すなわち、富貴や権勢に対する抵抗精神を持っている一方、地方出身の人々を輕蔑し、優越感を持っている。また性格の面では、強がりや癪持ちでもある。漱石は坊っちゃんの一連の行動描写を通じて、江戸っ子坊っちゃんの単純明快な性格を表したと同時に、その中に潜んでいる強がりという特徴をも浮き彫りにして、われわれに

示している。

この坊っちゃんと対照的に存在しているのは、『阿Q正伝』の阿Qである。魯迅は、清末の封建的な中国の農村地帯で生活している一人の農民阿Qをめぐる一連の失敗談の描写を通して、彼の屈折した性格を讀者に示した。作品の中に阿Qと村人との喧嘩の場面がいくつかある。阿Qは力が弱いのに、それを認めようとせず、無謀にもいつも喧嘩を売る。阿Qの喧嘩は、彼より力強い若い尼さん一人を除いて、いつも彼の負けで終わってしまう。それにもかかわらず、阿Qは常に失敗を勝利に変える秘術を持っている。それは魯迅独自の用語で表現された「精神勝利法」である。この精神勝利法が阿Qの減らず口の性格の歪んだ現れである。やや長いので、あえて引用する。

阿Qは、姓名や原籍がはっきりしないだけでなく、これまでの「行状」もはっきりしない。なにしろ未莊の人は、仕事に雇うときと、からかうとき以外は阿Qに関心がなかつたから、「行状」などはさっぱりだ。また阿Qも自分では口にしなかつた。せいぜい人と口論のときに眼をむいて、こう口にする程度だった。

「おい、むかしは——おめえなんかより、ずっと偉かつたんだぞ。おめえなんか、なんだってんだ！」(中略)

阿Qはまた自尊心が強く、未莊の住民はことごとく眼中になく、村にふたりいる「文童」さえほとんど齒牙にかけなかつた。そもそも「文童」とは、いつかは秀才に成り変わるはずのものだ。趙旦那と錢旦那が住民から深く尊敬されるのも、理由は金持ちだからというほかに、文童の父親だ

からである。しかし阿Qだけは、精神的にとくに尊敬をばらう様子がなかった。おいらの倅ならもつと偉くなるさ、とかれは考えていた。

【魯迅文集】第一巻 一〇二—一〇三頁

阿Qは、自分より強い人と喧嘩をして負けたときに「倅にやられたようなものだ。ちかごろ世の中がへんてこで……」と、決まって精神勝利法で自己を麻醉し、減らず口のあまり、その精神勝利法で、心理的な満足を得るより仕方がない。このような「精神勝利法」について、魯迅は、後年に書いた「眼を開いて見るを論ず」(学習研究社版『魯迅全集』第一巻 昭和五九年一月)という文章の中で、「中国人はものを正視することができず、欺瞞と詐欺を用いて奇妙な逃げ道をつくりながら、自分でまともな道だと思っている。この道は国民性の怯懦、怠惰、さらに狡猾を証明している」と述べている。しかし、阿Qの減らず口は右の部分に止どまらず、第三章の「統勝利の記録」にあるひげの王との風とり競争という場面が、阿Qの心理を極端な形で描く点において、阿Qの至んだ減らず口という心理の反映は頂点に達したと言えよう。普段、阿Qはひげの王を軽蔑しているが、並んで虱を取つてみたら、相手に負けてしまう。阿Qの自尊心が大いに傷つけられる。やはり長いが、引用する。

阿Qもボロ裕をぬいで、ひっくり返してみた。洗い立てのせい、それとも見方がぞんざいのせい、長いことかかって三、四匹しか見つからなかった。ひげの王はと見る一匹また一匹、二匹また三匹と口へほり込んでピッピッと囓んでいる。

はじめ阿Qはがっかりした。それから癪にさわった。見られたさまじやないひげの王があんなに多くて、自分がこんなになんて少なくて、面目まるつぶれだ。せめてでかいやつ一匹でも二匹でもつかまえたが、さっぱりいない。やっときさ中くらのを一匹つかまえて、いまいましそうに厚い唇のなかへ押し込んで、思いきり咬むと、ピッと音がしたが、とてもひげの王には及ばない。

全部の禿げをまっ赤にして、かれはうわ着を地面に叩きつけ、ペッと唾を吐いてどなった。

【魯迅文集】第一巻 一〇九頁

虱の数まで相手に負けたくないという阿Qの減らず口はもう救いようがない。これらの阿Qの喧嘩の場面を読んで、思わず噴き出し、情けないと思うだけでは、魯迅の風刺の真髓を見落とすことになる。阿Qの言動はかなり誇張されたので、滑稽のように見えるけれども、実際、魯迅の時代に、長い歴史によって形成された中華思想を持つている一般民衆は、西洋列強の先進性に対する自分たちの後進性を、なかなか素直に認めようとしない。たとえ自分の欠点を指摘されても、まずそれを認めない。さらに明確に指摘されて、認めざるを得ないときに、必ずと言っていいほど言い訳をして自己弁護をする。これは魯迅の文集「熱風」(学習研究社版『魯迅全集』第一巻 昭和五九年一月)における「随想録三八」を読むと分かるように、当時の現実生活の中では決して珍しくない。彼らの考えを支えているのは「集団的尊大」と「愛国的尊大」であって、彼らにとつて、最も大切なのは面目である。面目を保とうと必死で、時には阿Qのように虱の数の多さ

を争つても恥とは感じない。その時、彼らには、もう「虱」の意味するところを考ふる精神的余裕はなかった。右の引用文における、ユーモアに富んだ描写の裏に、阿Qの畸形な負け惜しみ、言い換えれば減らず口が、形こそ違ふが、近代史上の阿片戦争から始まる連戦連敗を経験した一般民衆の中に浸透し、中国民衆の国民性を毒化したことに対する魯迅の辛辣な風刺と怒りが含められている。そのほか、ひげの王と阿Qが虱を取って口に入れる場面の動作は、猿山の猿のようである。もちろん、魯迅はここで明らかに現実生活を写生している訳ではない。魯迅は、阿Qとひげの王の奇怪な拳動を通して、留学期に受け入れたニーチエの反進化論思想、つまり人間から猿への退化を意識して、ニーチエの反進化論の思想を具体的に再現しようとしたと思われる。

四

「坊っちゃん」と「阿Q正伝」を比較すると、以上の坊っちゃん和阿Qの性格の特徴がかなり意識的に造形されたような気がする。そういう意味において、彼らの強がりと減らず口の特徴の象徴的把握に関しては、類似性をはつきり感じられる。が、それ以外両作品にはいま一つ共通点が存在していると思われる。それは「坊っちゃん」と「阿Q正伝」が共に主人公の視点を中心として、物語を展開していることである。「坊っちゃん」は一人称で、「阿Q正伝」は三人称であつて、語りの方法が違うが、実際には作品は最初から最後まで主人公の関わる一連の事件という一本の縦糸によつて繋げられて、それ以外主人公の視点を離れて物語を

進める横糸による展開はない。それで、作品の中では、作者は賛美にしても、批判にしても、主人公の視点に基づいて、その「自己」中心的な価値観、そして、それによる失敗談を特徴的に捉え、主人公を描き出したことに注目したい。

まず、坊っちゃん和阿Qは共に小説の舞台になつてゐる地方の元の住民ではなく、よその人間である。坊っちゃんはもともと東京生まれ東京育ちのいわゆる江戸っ子で、学校卒業後、四国の小さな町にある中学校へ数学教師として赴任したのである。小説の舞台は坊っちゃんにとっては、ただ一時の働き場所に通ぎない。一方、阿Qは作品冒頭の紹介「かれは長く未荘に住んでゐたもの、しばしば移住もしたので、未荘の人とはいへない」によると、出身地が不明である。作品の舞台となる土地に対する帰属感のない坊っちゃん和阿Qは、よその人間として、その土地の常識に拘束されない自由な意識を持つてゐる。そして常にその土地の住民に対して對抗意識を持ち、また同時に批判の目を光らせてゐる。坊っちゃんは四国の小さな町の住民を田舎者として見くびつて、事あるごとに自分が「元は旗元だ。旗元の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生まれからして違ふんだ」と言つて、自分が江戸っ子であることをほこりに思つてゐる。それで、坊っちゃんは四国の小さな町の住民、宿の主人を始め、学校の教え子たちから同僚、教頭、校長のことまで目にとめることなく、初対面のときにすでに同僚の一人一人にあだ名をつけて馬鹿にしてゐる。

一方、阿Qは「姓名や原籍がはつきりしないだけでなく、これまでの『行状』もはつきりしない」ような者なのに、人と喧嘩

をするとき、「おいら、むかしは——おめえなんかより、ずっと偉かったんだぞ。おめえなんか、なんだってんだ！」とよく言う。それに、「阿Qはまた自尊心が強くて、未荘の住民はことごとく眼中になく、村にふたりいる『文章』さえほとんど歯牙にかけない。

坊っちゃんの江戸っ子意識にしても、阿Qの空想の優越感にしても、結局、彼らはそういう意識の下で、地元の住民に強い対抗意識を持っている。坊っちゃんは汽船を降りた時点から、絶えず四国の小さな町や住民の風俗を批判する。船頭の真つ裸に赤ふんどし姿を見て、野蠻だと決めつけ、町に対する第一印象は「大森位な漁村だ」というものであった。陸に上がって「小僧をつかまへて中學校はどこだと聞いた」が、相手が知らないと言えたら、「氣の利かぬ田舎ものだ。猫の額程な町内の癖に、中學校のありかも知らぬ奴があるのか。……」と文句をつける。そして、校長と教頭が宿直を免除されるという、言わば「強者の權利」という社会常識に対しても、あえて異議を唱えようとする。坊っちゃんはその作品の大半にわたって、不満と文句を並べて強い反抗精神を現している。

この点において、阿Qも坊っちゃんと似ている。阿Qはよその人間として未荘の住民に対してだけ、批判と反発をするのではなく、町へ行つて町の住民たちの習慣にも批判の目を向ける。『阿Q正伝』の第二章「勝利の記録」における部分に次のように書いてある。

たとえば、長さ三尺幅三寸の板でできた腰掛けを、未荘では「長凳」とよび、かれも「長凳」とよんだが、城内では

「条凳」とよんでいる。これはまちがっている、おかしい話だ、とかれは考える。鯛のから揚げに、未荘では長さ五分ほどの葱を添えるが、城内では葱のみじん切りを添える。これもまちがっている、おかしい話だ、とかれは考える。ところで、未荘の奴らときたら、世間知らずのおかしな田吾作だから、城内の魚のから揚げさえ見ちゃいねえんだ。

『魯迅文集』第一卷 一〇四頁

漱石は、坊っちゃんの言葉を借りてその土地の風俗を批判するだけに止まらず、うらなり先生の送別会の中で、狸や赤シャツの嘘つきの送別の辞を描いて、彼らの虚偽性を暴露した。また、送別会の場面の描写を通して古賀先生の離任に対し、同じ土地の人間として長く付き合つたはずの中学校の同僚たちが少しも惜別の気持ちはなく、むしろ送別会の御馳走を楽しみだけが目的であるように、薄情なのを厳しく批判した。また、送別会の途中から芸者の入場後、会場雰囲気の変化の描写を通じてこの四国の小さな町における「最高の教養」の持ち主の集団と言われた中学校の先生たちの低俗さをも批判した。

坊っちゃんと阿Qの視点は、現実的にしろ精神的にしろ、みな上から下への鳥瞰であり、しかも自己中心的で、主観的であるという点で共通している。ただその違いは、『坊っちゃん』が、日頃一般人も持ちやすい都会人対田舎人の意識、またはいわゆる江戸っ子意識に基づいた批判によって、読者の共鳴を呼んだのに対して、『阿Q正伝』は、阿Qの無知無能と減らず口のコントラストを極端に誇張して、その面白さを醸し出したのである。阿Qは城内の人たちや村の人たちよりずっと社会的地位が低く、能力

も劣るので、彼の鳥瞰の意識はどちらかと言えは、空中楼阁のよ
うなもので、もろくて崩れやすいものである。一方、やはり坊っ
ちゃん和阿Qは、よその人間なので、地元の人たちとうまく行か
ず、結局彼らにいじめられて、失敗談を重ねる結果になった。そ
の典型的な事件として「坊っちゃん」には宿直事件があり、「阿
Q正伝」には賭博事件がある。

宿直事件とは、坊っちゃんがこの小さな町の中学校へ来て初
めての宿直のときの出来事である。夜、床に入って寝ようとする
ときに、生徒のいたずらで毛布の中にバツタをたくさん入れられ
たことに気づく。また、その後、生徒たちは宿舍の二階で声を揃
えて叫んだり拍子を取って床板を踏み鳴らしたりして騒ぐ。いた
ずらの生徒を捕まえようとして、坊っちゃんは二階へ駆け上った
が、生徒たちの罠にはまって二階で転んで怪我をし、大いに恥を
かく。彼は生徒たちを捕まえて朝まで詰問するけれども、結局犯
人は分からないまま終わってしまう。

阿Qも似たような事件を経験する。ただ、阿Qの場合はいた
ずらではない。未荘の賭博場で阿Qはいつも負けるほうである。
「ところが、「人間万事、塞翁が馬」だ。不幸にも阿Qは一度だけ
勝った。しかし結果は負けたも同然だった」「かれは勝ちに勝つ
た。銅銭が小銀貨にかわり、小銀貨が大銀貨にかわり、大銀貨の
山ができた。有頂天でかれは——／＼（中略）だれとだれとが何
のために喧嘩をはじめたのか、かれにはわからなかった。どなる
声、殴る音、駆ける足音でかれの頭は混乱してしまつた。ようや
くのことので起きあがってみると、もう賭場もなければ、人もいな
かった」〔魯迅文集〕第一卷 昭和五年一〇月。もちろん、

せっかく勝つて自分のものだと思ひ込んだ大銀貨の山もなくなつ
ていた。そういうお祭りの時期の賭博場にはもともと秩序がなく、
客の方が勝つと、故意に混乱を起こして、どさくさに紛れてその
お金を奪うのは日常茶飯事である。言うまでもなく、誰が騒動を
起こしたかわからず、言うまでもなく犯人を究明することはまず
不可能である。

このように、坊っちゃん和阿Qは、ともによその人間として
その土地の住民に対して批判的で、また対抗した。結局、彼らに
陥れられ、不幸な結果を招いてしまう。坊っちゃんは、最後に赤
シャツや野だをやつつけて四国の「不浄の地」を離れたけれども、
結果としてその中学校の月給四〇円の仕事をやめ、東京に戻つて、
二五円の「街鐵の技手」に甘んじざるを得なかつたのである。一
方、阿Qは革命の目的さえわからないまま、ただ口先で革命をし
ようと叫んだだけで兵士につかまり、隊長の「一人を罰するは百
人のいましめ」という考えの犠牲にされ、また隊長上任後の仕事
ぶりの功績として、無実の罪をかぶせられ、死刑に処せられた。
坊っちゃんは理想と正義の化身で、阿Qは逆に無知の弱者の代表
であるが、作品の終わりに、彼らの最後は同じくどこか読者の同
情を呼び寄せるような淡い哀愁が漂っているように感じられる。

五

平岡敏夫氏は「坊っちゃん」——「我日本国民に固有する瘦
我慢の大主義」の発想」〔国文学 解釈と教材の研究〕平成六
年一月臨時増刊号」という論文の冒頭に「坊っちゃん」を「涙な

くしては読めぬ小説」と述べ、また「坊っちゃん」の前の作品『趣味の遺傳』の一節である、「滑稽の裏には眞面目がくつ付いて居る。大笑の奥には熱涙が潜んで居る。雑談の底には啾々たる鬼哭が聞こえる」を引用して、「坊っちゃん」が「眞面目、熱涙、鬼哭の作品であること」を説いた。同時に、坊っちゃんの強がり「我日本国民に固有する瘦我慢の大主義」を象徴すると強調している。前に引用したように、伊藤整は「坊っちゃん」を「日本人の諸性格の、それまでに全く類のない把握である」と指摘して、また「主人公の楽天性、その同情、その無邪気さ、そして他の人物にある日本的薄汚なさ、みみつきさ、卑劣さ、弱小さ、豪傑ぶり、それは実に完全な日本の性格である」（『現代日本小説大系一六』解説前出）と、分析した。井上ひさし氏は、「坊っちゃん」―百年の日本人―夏目漱石（『日本文学研究大成 夏目漱石』国書刊行会 平成元年十月）において、「悲しい読後感を抱かせられるのは、小説を底流している『よき日本人は絶滅した』というメッセージのせいだろう。べつに言えば、この小説での東京とは、すでに滅びてしまった理想世界であり、中学校の所在地である四国の都市こそが現世なのである。（中略）坊っちゃんは江戸ッ子ということをさかんに言うけれど、じつはそのような（真つ直でよい気性の、気の利いた、卑怯なことの嫌いな、長く心配しやうと思つても心配が出来ない、さつぱりとしてゐて無頓着な、陰でこせこせしない、世の中に正直が勝たないで外に勝つものがあるかと信じてゐる、純粹で単純な、竹を割つたやうな、人のよい、そそつかしいが妙な所へこだはらない、計略は下手でも喧嘩と成るとすばしつこい、人情に厚い、勇み肌で弁解嫌いの（すべ

て「坊っちゃん」の本文から拾つた）」江戸ッ子「よき日本人は、もう四国の都市に現世にはいない」と、述べている。

一方、『阿Q正伝』の中に、魯迅も滑稽や風刺の描写法を十分に使い、阿Qという典型人物を造形した。そして、「坊っちゃん」と同じく、「滑稽の裏には眞面目がくつ付いて居る」という共通の特徴はあるが、しかし、「大笑の奥には熱涙が潜んで居る」のではなく、むしろ一種のむなしさと情けなさが感じられる。魯迅は「ロシア語訳『阿Q正伝』序」（『魯迅全集』第九卷 学習研究社 昭和六〇年六月）において、「書くには書いてみたものの、わたしがほんとうに、現代のわが国の人々の魂を描くことができただかどうか、結局のところ、自分にはまだ、しかとした自信がない。」と言つた。また阿Qの人間像の普遍性について、魯迅自身の証言を聞いても、納得できるのであろう。

……そういえば『阿Q正伝』が一回また一回区切つて発表されていたころ、多くの人が、次は自分がやつつけられる番ではないかと戦々兢兢としていたものだ。また實際、友人のひとりとは、面と向かつて私にこう言つた。どうも『阿Q正伝』のきのうのくだりは、おれの悪口らしい、と。そして『阿Q正伝』の作者は某にちがいない、なぜなら、おれのあの件を知つてゐるのは某のほかにはいないから……それからは疑心暗鬼で、『阿Q正伝』中で槍玉にあげられてゐることは、何から何まですべて自分への当てこすりだと思つようになり、『阿Q正伝』を連載している新聞と関係のある寄稿者に、片はしから『阿Q正伝』の作者だという嫌疑をかけるようになった。ところが、のちに『阿Q正伝』

の作者が誰だかわかってみると、自分とは一面識もない人なので、はたと膝をたたいて、今度は会う人ごとに、あれは自分のことではないと弁解してまわった」。

〔魯迅文集〕第四卷 七三頁

このように、漱石と魯迅は、「坊っちゃん」と「阿Q正伝」の中で主人公の典型的人間像を創り、当時の日本人と中国人の国民性の一側面を象徴的に描き出した。国民性とは、「広辞苑」では、「或る国民一般に共通する性質。一国民としての精神的特質」と、「日本語大辞典」では、「それぞれの国の国民にみられる共通の感情や精神的特質」というふうな解釈している。両方とも、国民に見られる共通の精神的特質を強調した。それで、もし読者は坊っちゃん和阿Qをそのまま現実生活にいる実在人物として認識し、モデル探しを試みるのは徒労に過ぎない。というのは、作者が執筆当初から特定のモデルを写実して作品を書いた訳ではないからである。作者は、特に魯迅の場合、一実在の人物の生活を描くというよりも、写実の手法で「想」世界を描いたのである。言い換えれば、作者は常識的観念に基づいて、「非」常識の主人公を作り出したのである。漱石も坊っちゃんという日常生活に到底存在しない、しかし誰もがその一面を持つ（又は持ちたい）人物を創造した。坊っちゃんは江戸っ子の典型的な特徴を一身に集めた、古き好き時代の日本人の「善」の化身であって、架空の人物である。架空の人物を通して、作者は自分の思う通にそのすべての理想を体现することができ、普遍的な精神的特質を表現し得るし、そして、架空の人物であるからこそ、坊っちゃんは作品の中で、正直に自分の本音を遠慮なく吐き、しかもそれを貫くことができ

たのである。

そもそも、たてまえを重んじる日本社会の中で、本音で生きて行こうとするのはただの理想であって、現実では不可能のことである。坊っちゃんのイメージが日本社会では特に庶民好みのタイプで、現在に至っても、日本の国民的支持を得られる文芸上の人間像とつながっているのではなからうか。その共通の特徴と言えば、第一に価値判断（善悪感）は明白、単純で、理屈抜きで、一般庶民に受け入れやすい。第二に主人公は現実生活の中で暮らしているとは設定されなにかかわらず、社会の束縛、又は社会の日常生活を超えて、精神的な自由を享受できる、いわゆる「非」常識の持ち主である。第三に主人公は、必ずと言ってよいほど、エリートではなく、庶民的で、親しみやすい人物である。第四に主人公は物語が展開するにつれて、失敗談を重ね、善意的に笑われる対象である。そういう意味では、漱石の「坊っちゃん」は、近代文学におけるこのような人物のパイオニアとしての地位を占めているのではないかと思う。漱石は明治という目まぐるしい変動の時代に生き、処女作の「吾輩は猫である」において、浅薄な文明開化を批判してから、その後の「坊っちゃん」の中で意識的に坊っちゃんという正直で正義に溢れた「よき日本人」を創ったのであろう。

ところで、漱石の「よき日本人」の坊っちゃんと対照的に、魯迅は逆に「悪しき中国人」のすべての「悪」を阿Qの一身に描いたと言えるのではなからうか。私達は阿Qという人物の性格から、卑劣、臆病、無恥、狡猾、エゴイズム、盲従など、中国人の国民性の暗黒面のすべての要素を見つけることができる。もちろん

ん、阿Qも完全架空の人物である。魯迅は「阿Q正伝」を書く前から、その透徹した社会観察によって、かなり長いあいだ阿Qのイメージを頭の中であたためていたらしく、執筆の段階になって、一気にそれを吐き出したのである。阿Qの身分は一般庶民以下であり、社会最下層の遊民に属するが、彼の思想は決して特殊な遊民思想の代表ではない。彼の言動は多くの庶民の価値観を代表しており、また身分違いの読書人たちの言動をも凝縮して、反映している。例えば、「阿Q正伝」の第四章「恋愛の悲劇」における、「男女の別」についての阿Qの道徳論は遊民の考えというよりも、むしろ当時の中国思想の正統とされる儒教の道徳家たちの主張を誇張して表現したものである。そのほかに、第二章の「勝利の記録」において、次のような段落がある。

阿Qは「むかしは偉かった」し、見聞は広いし、しかも「働きのいい」から、ほんとは「完全人間」のはずだが、惜しいかな体質的にやや欠点があった。最大の悩みの種は頭に数カ所、いつからともなく疥癬のあとが禿げになっていることである。これだつて自分の肉体の一部にはちがいないが、こればかりはさすがの阿Qも自慢にはならぬらしく、その証拠に「禿げ」ということは、および一切の発音がそれに近いことばをきらった。その範囲がだんだんひろがつて、のちに「光る」も禁句、「明るい」も禁句になった。もつと後になると、「ランプ」や「臘燭」まで禁句になった。その禁を犯すものがあると、故意であろうがなかるうが、阿Qは禿げまでまっ赤にしておこり出す。……

〔魯迅文集〕第一卷 一〇四頁

これはやはり当時の読書人や一般庶民の骨髓に入った中華思想を意識した風刺であろう。つまり、長い文明史と高度な文化を誇りにした多くの国民が当時の中国の惨めな現状をなかなか正視しようと思わず、自分の欠点を指摘されると、すぐ冷静さを失って相手と争う様子を鮮明に描き出した。また、阿Qの性格における最大の特徴——精神勝利法は実際には多くの読書人と国民に共通した、空虚な自尊心の誇張した形式である。この精神勝利法こそ、かつて世界帝国まで築いて世界の文明発展に大きく寄与した民族にとつて、弱肉強食の時代に敗北に敗北を重ね、悲運のどん底に陥つたときに、唯一に見栄を保つ心理的な自慰の手段である。阿Qは敗北するとき、必ず「倅にやられたようなものだ」とか、「おいら、むかしは——おめえなんかより、ずつと偉かったんだぞ」とか言つて、自己満足をする。これは明らかに当時のいわゆる「中華の精神文明は西洋の物質文明より勝る」などの論調を意識して、それを精神勝利法に変形し、中国人の民族性における自己欺瞞と虚偽を批判しているのではないかと思う。このように、坊っちゃんの強がりはいわゆる「我日本国民に固有する瘦せ我慢」の原点であり、これと同じように、阿Qの減らず口は清末の中国民衆の国民性の暗黒面——精神勝利法の出発点であると言える。漱石と魯迅がそれぞれ小説の中に国民性の一側面をうまく捉え、典型的人物の性格の造形によつて、ある普遍的な特徴を的確に反映した。同じ国民性に対して、漱石は明るい面を、魯迅は暗い面をポイントにおいて描いただけの違いである。

最後に、「坊っちゃん」と「阿Q正伝」の共通した表現の特徴である滑稽の書き方に触れておきたいと思う。周知のとおり、漱

石は青少年時代から、落語に親しんだという事実があり、落語的ユーモアセンスを身につけた。しかも処女作などの初期作品において、読者の笑いを誘うような書き方をしている。水川隆夫氏は『漱石と落語』（彩流社 昭和六年五月）の中で「我輩は猫である」の落語的要素を分析し、ネタ明かしを試みた。しかし、漱石の初期作品におけるユーモアは江戸小咄などの笑い話と違い、独特な特徴を持っている。まず、『坊っちゃん』の面白い所を二三拾って見てみたい。例えば

(イ) タベの下女が膳を持つて来た。盆を持つて給仕をしながら、やにやにや〜笑つてる。失敬な奴だ。顔のなかに御祭りでも通りやしまいし。

〔漱石全集〕第三卷 一一七頁 傍線筆者)
(ロ) おれは、控所へ這入るや否や返さうと思つて、うちを出る時から、湯銭の様に手の平へ入れて一銭五厘、學校迄握つて来た。おれは膏つ手だから、開けて見ると一銭五厘が汗をかいて居る。汗をかいてる銭を返しちや、山嵐が何とか云ふだらうと思つたから、机の上へ置いてふう〜吹いて又握つた。

(同前 一一五頁)
(ハ) 赤シャツは歩くき方から氣取つてる。部屋の中を往來するのでも、首を立てない様に靴の底をそつと落とす。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒の稽古ちやあるまいし、當り前にするがよい。

(同前 一一五頁)

このように、読んで思わず吹き出す段落が多い。『坊っちゃん』の面白さは、普通の笑い話のようにストーリーとその結末の「落ち」によって導かれるのではなく、言葉の表現によって滑稽さが醸し出されるのである。

魯迅も、同じように、滑稽の表現手法を使って、『阿Q正伝』を書いた。読者は最初それを読むときに、その中に含まれた問題点を考える前に、まずその笑いを誘うような書き方に魅了される。魯迅は、『阿Q正伝』の成り立ち（『魯迅全集』第四卷 学習研究社 昭和五九年一月）において、自分の作品が最初「晨报副刊」という新聞のユーモア文学欄のために書いたと認めており、しかも魯迅兄弟はかなり前からユーモアについて高い関心を持っていた。魯迅は一九二七年に鶴見祐輔著の「ユーモアについて」を訳したばかりでなく、ユーモアと風刺について多くの発言をしていた。特に、魯迅の実弟周作人は一九三三年中国古代の笑い話を集めて、『北新書局より「苦茶庵笑話選」を出版したという事実があり、ユーモアに対する彼らの関心の高さを物語っている。中国古代の笑い話を読むと、もちろん単なる笑いを追求する話も少なくないが、風刺を兼ねたものが大きな比重を占めている。いわゆる「寸鉄、人を殺す」という鋭い風刺の技術が重んじられていた。読者を笑わせる手法としては、言葉の滑稽な表現によるものがほとんどなく、やはり最後の「落ち」によって人を笑わせるのが主流である。魯迅はもちろん伝統の風刺の技術を継承したが、表現の面では恐らく漱石のような外国作家の作品の表現手法を参考にした可能性を否定できないのであろうと思われる。実際、『阿Q正伝』の序にあるような、ほぼ饒舌に近い書き方を見ると、

漱石の手法にかなり似ている。魯迅は留学時代からあれだけ漱石文学に傾倒した事実を踏まえて考えてみると、『阿Q正伝』の表現手法の中に、漱石の初期文学の滑稽的な表現の特徴が投影されているように見える。

以上をまとめてみると、『坊つちやん』と『阿Q正伝』は内容が異なるけれども、主人公の性格の特徴の象徴的把握、それによる作者の世界観の明白な表明、自国の国民性の一側面の描出、そして、主人公の失敗談による物語の展開、滑稽な表現手法などの面において、共通した底流がはつきり存在しているのではないかと思われる。

〔注〕

〔1〕唐木順三氏の調査によれば、昭和三〇年の時点で岩波文庫の諸文学作品中で、『坊つちやん』の発行部数は、創刊以来最高記録を誇っているという。〔唐木順三全集〕第一巻 筑摩書房 一方、魯迅の『阿Q正伝』は、中国ではもちろんのこと、日本だけを見ても、発行部数かなり多い。角川文庫の『阿Q正伝』（狂人日記）『孔乙己』『故郷』『藤野先生』などを含む作品集は、一九六一年から一九七六年までの間だけ、すでに三十六版を重ね、四十万冊以上を発行したと言われている。〔魯迅と中日文化交流〕李連慶著 文化出版局 昭和五六年九月

〔2〕中国の古来の社会観として、目上の人が上位に立つとされるので、子供同士が喧嘩をするとき、事実と関係なく、自分が相手より身分的に目上だと言って、相手より偉いと、勝ちになるという。魯迅は阿Qに子供の喧嘩の慣習を使わせ、彼の自己欺瞞の本質を暴露した。

〔3〕『漱石全集』第三巻の「趣味の遺傳」（岩波書店 一九五六年八月二七日）一七八頁

〔4〕現代の日本社会において、長い間、国民的支持を得られた、庶民好みの典型的人物像は、何と言っても映画「男はつらいよ」の主人公、寅さんを挙げなければならないと思う。

〔5〕鶴見祐輔著『思想・山水・人物』（大日本雄弁会出版 一九二四年二月二五日）魯迅がその一部分「ユーモアについて」を訳し、一九二七年一月二〇日出版の『莽原』半月刊第二巻第一期に発表した。

〔6〕『中国笑話選』松枝茂夫・武藤禎夫訳（平凡社 昭和三九年八月一〇日）所収。

（らん でんぶ）

千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程在学